

令和二年四月十日発行

皇學館論叢第五十三卷第一号 抜刷

研究ノート

玉屋本『日本書紀』

——神武天皇紀を中心に——

安垣友貴

玉屋本『日本書紀』——神武天皇紀を中心に——

安 垣 友 貴

□ 要 旨

本稿では、これまで「改竄本」「正統／正当な『日本書紀』」からの逸脱」などと低く評価されてきた「玉屋本」を検討対象とし、特異性を具体的に示すとともに、玉屋本を新たな史料として位置づけることを試みている。特に、これまでもあまり触れられてこなかった神武天皇紀に関する独自性の提示し、書写者と書写年代を手掛かりとして、中世における『日本書紀』の受容や、注釈行為の実態を示す貴重な例の一つであることを指摘している。

□ キーワード

日本書紀 玉屋本 三嶋本 良海

はじめに

八世紀に成立した『日本書紀』は、現在に至るまで広く研究が進められているものの、その本文は未だ確定していない。従来、記紀そのものを研究すべきだと指摘されてきたが^①、中村啓信氏が神代巻の校本を作成して以来、校本が作成されていないため、卷三以降の本文校訂が必要といえる。日本書紀を使用した研究を深めるための前段階として、改めて諸写本の検討を行わなければならない。

『日本書紀』の写本研究の現状として、『日本書紀』の写本が古本系・卜部家本系に分けられること^②、岩波版・小学館版などの注解本、影印本・複製本の出版によって写本研究が進展してきたことが指摘されている^③。しかし、従来の写本研究は、各

写本を校訂のための「材料」とみなし、評価の高い写本と比較して「正しい」か「正しくない」かによって評価し、正しくないと評価された写本は本文校訂の際に重視されてこなかった。本稿では、その代表例として東京国立博物館所蔵「玉屋本日本書紀」（以下、玉屋本）を検討対象とし、その特性を具体的に示すこと、玉屋本を別の観点から見た、新たな史料として位置付けるを試みる。

一 神武紀諸本の概況

先述のとおり、『日本書紀』写本は大まかに古本系・卜部家本系の二類に分けられる。古本系は、卜部家本系以前の写本の様相を知ることのできる写本、卜部家本系は、卜部家に伝わった写本として知られている。⁽⁵⁾しかし、古本系・卜部家本系の内容から見るに、異系統であっても大きな違いは見られない。玉屋本、三嶋本は同じ人物によって書写され、内容の独自性から「その他」に分類されることが多く、玉屋本は神代巻に「古本系」の特徴を有していることから古本系に分類されること⁽⁷⁾もある。本稿では、玉屋本と諸写本の比較のため、古本系から北野本、卜部家本系から兼右本、熱田本、寛文九年版本、その他から三嶋本を選び、神武天皇紀全体で比較を行った。

玉屋本『日本書紀』（安垣）

日本書紀の主な写本

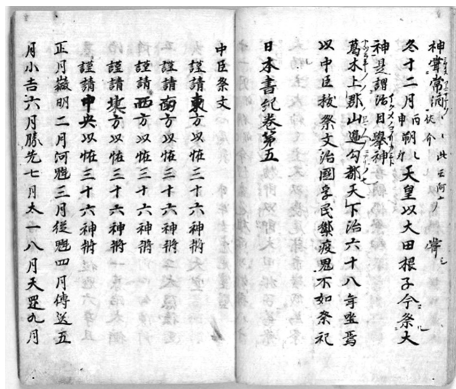
写本の名称	頁数	書写年代	所蔵
○古本系			
佐佐木本	1 葉	平安初期	東京・個人
四天王寺本	2 葉	平安初期	大阪・四天王寺
田中本	1 軸	平安初期	奈良・奈良国立博物館
岩崎本	2 軸	平安中期	京都・京都国立博物館
前田本	4 軸	平安後期	東京・前田育徳会尊経閣文庫
図書寮本	7 帖	1142、1346 奥書	東京・宮内庁書陵部
北野本	27 帖	鎌倉～江戸期の 5 群	京都・北野天満宮
向日神社本	1 冊	南北朝期	京都・向日神社
○卜部家本系			
弘安本（兼方本・吉田本）	2 軸	1286 裏書	京都・京都国立博物館
乾元本（兼夏本）	2 軸	1303 書写	奈良・天理大学附属天理図書館
水戸本（剣阿本）	2 軸	1328 書写	東京・徳川ミュージアム
兼右本	28 冊	1540 奥書	奈良・天理大学附属天理図書館
熱田本	15 軸	1375～77 奉納	愛知・熱田神宮
内閣文庫本	10 冊	室町末期	東京・国立公文書館
寛文九年版本		1669 印行	
○その他			
玉屋本	1 冊	1416～1433 奥書	東京・東京国立博物館
三嶋本	6 軸	1428 奥書	静岡・三嶋大社、東京・國學院大學

二 玉屋本日本書紀

東京国立博物館所蔵である玉屋本は、全三十巻のうち、巻第一（神代上）から巻第十（応神紀）までを三冊に収めた写本で、現在は東京国立博物館に所蔵、インターネット公開されている。法量は二五・一×十五・七で、焦茶色の表紙が付き、表題は見えない。表紙右上のラベルによると、「明治三十八年／歴史會三八號／寄贈」とあり、寄贈を示すものがある。三冊それぞれの本文一丁目上部に、「東京尋常師範学校蔵書印」の印があり、各冊の裏表紙見返しに、本文とは別に「智積院^⑩」と墨書があることから智積院旧蔵本であったと考えられ、後に智積院から流出し、江戸時代に吉原の玉屋山三郎の元にあった。後に玉屋本と呼ばれている。一面は八行×十七字を基本とし、分註、干支を二行で記し、読みや訂正箇所を朱書きする箇所がある。第一冊は表紙裏に「神祇部一」、本文内題に「神代上日本紀第一」とあり、すでに指摘があるように、神代上・下は「類聚国史」の一部である。これまで、写本としての玉屋本に対する評価は「極めたる改攙本」^⑫、「日本書紀」としては特異なもの^⑬、「正統／正当な『日本書紀』からの逸脱」^⑭のように、総じて低いものであった。一方で、「玉屋本は、『日本書紀』成書以後、その本

文が書写の環境に合わせて改編されてきた形跡を色濃く残す。いわば状況に応じて変化した『日本書紀』である。」^⑮といった評価もされている。

しかしながら、巻三以降に関する玉屋本の研究は、巻四以降の内容の独自性の指摘にとどまり、巻三に対する再評価、内容検討は行われていない。既に指摘されているのは、本文が「日本紀」で始まること、巻五（崇神天皇紀）における中臣祭文の挿入、巻四以降の文字異同、巻四以降の独自注釈の挿入の四点である。



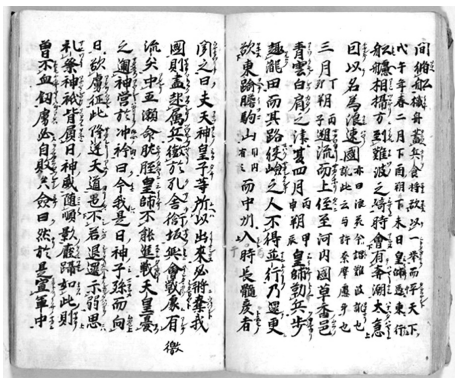
【巻五（崇神天皇紀）における中臣祭文】

三 玉屋本日本書紀の独自性

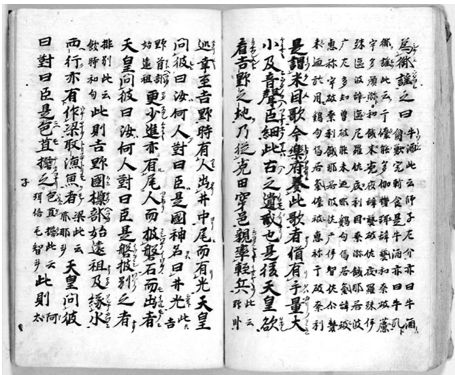
・「孔舎衛」と「孔舎衛」（夏四月丙申朔庚申）
地名である「クサカ」（日下、草香）を、諸写本では「孔舎衛」（クサエ）と誤っており、岩波版・小学館版共に「孔舎衛」を本文に採っている。一方、玉屋本は「孔舎衛」としており、「クサカ」と正しく地名を記述している。したがって、地名を考慮

した場合、諸写本の「孔舎衛」ではなく、玉屋本の「孔舎衛」を採ることもあり得る。

しかし、玉屋本がオリジナリティの強い本文を持っているということや、書写年代が十五世紀という比較的新しい写本であることなどを踏まえると、「孔舎衛」を「孔舎衛」と間違えて書写した可能性、「孔舎衛」では地名「クサカ」に合致しないことに気付き、「孔舎衛」に改めて書写した可能性も考えられ、玉屋本の「孔舎衛」表記を本文とすることは難しい。



【「孔舎衛」と「孔舎衛」（夏四月丙申朔庚申）】



【八月甲午朔乙未 牛酒】

・「ムクロ」の表記

熱田本、北野本では、「身」という感じに対して「ムクロ」と訓読しており、玉屋本は「髀髀」に「ムクロ」と訓読している。このことから、玉屋本書写年代において、卜部家本系統本が伝わっていたということ、玉屋本が、熱田本・北野本などの卜部家本系統本の和訓に従って訓読を附していると考えられる。



【「ムクロ」の表記（春二月壬申朔辛亥）】

・独自注釈

（イ）六月乙未朔丁巳

遂越^ニ狭野。^{（新宮与那智境。）}

（ロ）八月甲午朔乙未

〔牛酒此云三師子左介。亦曰^ニ牛酒。禽獸食斬食^レ是牛酒。

亦曰^ニ牛乳。^{（7）}

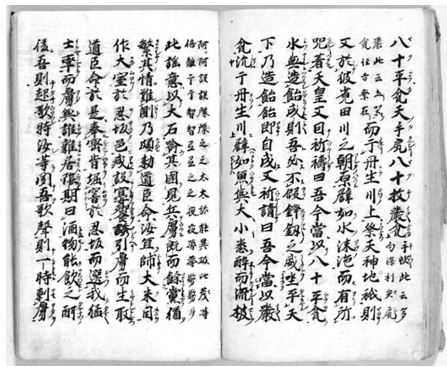
「牛酒」は熱田本では「シ、」と訓が付されているが、玉屋本では、「師子左介」（シシサケ）と割註で記しており、ここにおいても玉屋本の独自性が垣間見える。

（ハ）九月甲子朔戊辰

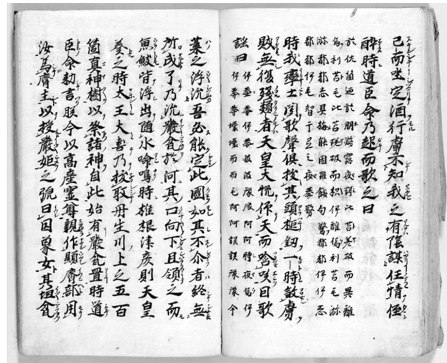
嚴瓮^{（手扶）}。此云^ニ多句深利矣尻。嚴此云^ニ土器。瓮住吉

祭在。^{（8）}

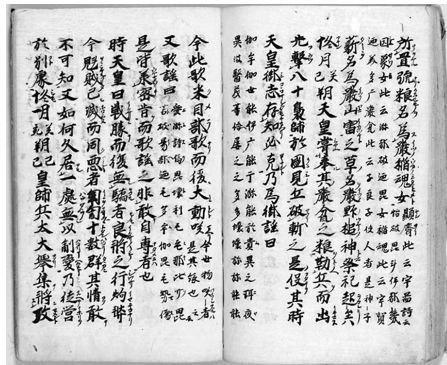
「瓮住吉祭在」について、住吉大社には「埴使」という神事があり、毎年二月、十一月の祈年祭、新嘗祭に先立って、その土器を製造するために埴使が埴土を畝傍山で採取する。このことから、瓮が住吉にあるという注釈を付したのである。これは本文と注釈とが混在する玉屋本の特徴を示す箇所である。



【九月甲子朔戊辰①嚴瓮】



【九月甲子朔戊辰②】



【九月甲子朔戊辰③】

また、九月甲子朔戊辰①には

（諸写本）

天皇大喜、乃拔三取丹生川上之五百箇眞坂樹、以祭三諸神。

自此始有「嚴瓮之置」也。時勅「道臣命」。今以「高皇產靈尊」。

朕親作「顯齋」。〈顯齋。此云「于圖詩怡破毘」〉。用「汝爲三齋」。

主。授以「嚴媛之號」。而名「其所置壇瓮」爲「嚴瓮」。又火名

爲「嚴香來雷」。水名爲「嚴岡象女」。〈岡象女。此云「瀨菟破魂」

迷〉。粮名爲「嚴稻魂女」。〈稻魂女。此云「于伽能迷」〉。薪名

爲「嚴山雷」。草名爲「嚴野椎」。

（玉屋本）

太王大喜、乃拔三取丹生川上之五百箇眞坂樹、以祭三諸神。

自此始有「嚴瓮之置」也。時勅「道臣命」。今以「高皇產靈尊」。

「欠」親作「顯齋」。〈顯齋。此云「于部圖詩怡破毘」〉。用「汝

爲三齋主」。以授「嚴姫之號」。日岡象女其垣瓮所置号。粮名

爲「嚴稻魂女」。〈跋齋。此云「于圖詩云怡破毘」。尹伊都幾國

象女、瀬都破迦毘女、稻魂此云^二字賀迦美多^一。嚴筵此云^二子良子使人者是神子^一。薪名^二爲嚴山雷^一。草名爲^二嚴野椎^一。

「天皇」を「太王」、「授以」を「以授」、「媛」を「姫」といった文字異同、「朕」の脱落、諸写本にない「部」の追加、本文の著しい逸脱が顕著に見られる。

さらに、同九月甲子朔戊辰では、装丁ミスも確認できる。本来、写真①八行目以降は、写真③七行目に続き、写真②一〜七行目までは、写真③八行目に続かねばならないため、装丁ミスと考えられる。

このように、諸写本と比較すると、卷三に關しても強いオリジナリティが見られた。玉屋本がどのような『日本書紀』を写したのかについては不明であるが、少なくとも、古本系・卜部家本系として知られる諸写本を手本として、忠実に書写することを目的として書かれたものではないだろう。

三 玉屋本と良海

玉屋本、三嶋本の奥書に「良海」の署名があることから、両者の作者は良海という人物であると考えられている。各奥書によると、良海は、応永二十三年に玉屋本神代上を書写した後、

応永三十五年に三嶋神社で三嶋本を、永享三年から菅田八幡宮、永享五年から武林峯、若狭遠敷下宮（若狭姫神社）⁽²²⁾で玉屋本を書写したことがわかる。

良海については、「恐らく彼には快尊や重尊・真尊の如き弟子的な助力者があり、正体某の如き檀那が所在にいた」「彼は若州・河州・江州などにおり、豆州三嶋も、彼の留まるに一つの有力な基地であったと思われる」「智積院に關係する僧侶」「若狭一宮に居りこ、の神宮寺が真言系であつたよりして、良海は真言宗の人であつた」といった指摘がされているものの、現段階でこれ以上の情報は追うことができない。しかし、玉屋本、三嶋本の書写者「良海」と同時代に、

(イ)「高野山文書」応永三十一年正月十九日「大法師 良海

（花押）」

(ロ)「高野山文書」永享三年勸學院良海起請文「永享三年卯

月廿五日勸學院良海（花押）」

などの「良海」の名が見られ、書写者良海との関連は不明であるが、複数の良海の存在が確認できる。

中世における神社と僧侶の關係から考えると、良海の玉屋

本・三嶋本書写と同時代の熱田本日本書紀の寄進状に、

奉納 熱田太神宮内院日本紀用卷十五卷^{第一卷}（中

略）圓福寺三代嚴阿所事沙汰也

とあり、熱田本が僧侶によつて奉納されたことがわかる。このことから、中世において、僧侶の日本書紀信仰があつたといえるだろう。

また、玉屋本が「神代上日本紀巻第一」から始まり、「日本紀」という中世的な呼称を用いていること、⁽²⁶⁾他の書写本には存在しない、本文に対する独自の注釈を付していることから、「註釈の断片を本文中に併せ持つ諸本こそ、むしろ中世註釈のひとつのありようとして見直されてしかるべき」といわれていること⁽²⁶⁾から、玉屋本はまさに、中世における『日本書紀』の受容や、注釈行為の実態を示す貴重な例の一つといえるだろう。

おわりに

これまで、玉屋本は『日本書紀』の写本として、内容の著しい独自性から、「改撰本」「正統／正当な『日本書紀』」からの逸脱」と捉えられてきた。しかし、『日本書紀』の写本としてはオリジナリティが強いいため、『日本書紀』と玉屋本を同一の史料と捉えてはならないのではないか。そこで、玉屋本が僧侶によつて書写されたこと、同時代に熱田本が僧侶によつて寄進されたことに注目すると、中世における僧侶の日本書紀信仰が窺えた。中世に書写されたこと、表題が「日本紀」となっている

玉屋本『日本書紀』（安垣）

良海の足跡

年代	場所	書写内容
応永二十三年（1416）	記載なし	玉屋本神代上
応永三十五年（1428）	三嶋宮	三嶋本
永享三年三月（1431）	河内、誉田八幡宮東一院	玉屋本巻九
永享三年卯月（1431）	河内、誉田八幡宮東一院	玉屋本巻十
年号なし	河内、誉田八幡宮東一院	玉屋本巻三
永享三年辛亥七月（1431）	河州長野誉田八幡宮東院	
永享五年三月（1433）	江州、犬上郡武林峯	玉屋本巻四
永享五年三月（1433）	江州、犬上郡武林峯	玉屋本巻八
永享五年（1433）	江州、犬上郡武林峯	玉屋本巻七
永享五年五月（1433）	若狭、遠敷下宮	玉屋本巻五
自応永廿三年至永享五年	若狭、遠敷下宮	玉屋本巻六

こと、内容に独自注釈を加えているという点から、中世における『日本書紀』受容や、注釈の実態が伺える例の一つといえる。玉屋本を『日本書紀』の写本として「改攪」などと解釈して切り捨てるのではなく、中世における一テキストとして位置付けたい。

しかしながら、玉屋本の底本となった『日本書紀』が、どの時代の写本で、玉屋本以前から独自解釈を付していたのか、僧侶良海とはどのような人物であるのかということについては今後の課題としたい。

注

- (1) 坂本太郎「記紀研究の現段階」(『坂本太郎著作集』二、吉川弘文館、一九六三年)、荊木美行「日本書紀研究の現在」(『日本書紀の誕生』、八木書店、二〇一八年) など
- (2) 中村啓信『校本日本書紀』(國學院大學日本文化研究所編、角川学芸出版、一九七三年)
- (3) 大野晋『日本書紀①』(新編日本古典文学全集2、一九九四年)
- (4) 石上英一「日本書紀の写本」(『日本書紀の誕生』、八木書店、二〇一八年)
- (5) 毛利正守他編『日本書紀①』(新編日本古典文学全集2、

小学館、一九九四年) また、植田麦(二〇一九年) において、『日本書紀』写本のうち、神代巻については、一書を正文に続けて小字双行にするものを古本系、一書を改行して一段下げの大字単行にするものを卜部系と呼ぶことが多い」としている。

- (6) 毛利正守他編『日本書紀①』(新編日本古典文学全集2、小学館、一九九四年)

(7) 近藤喜博「玉屋本日本書紀に就いて」(『藝林』第二巻第二号、一九五一年) によると、神代巻は古本系に分類されるものの、諸写本の古本系とは性格が異なるとあるため、神代巻が古本系の特徴を持つとはいっても慎重に考える必要がある。

- (8) 日本書紀撰進千二百年記念会編『日本書紀古本集影』(一九二〇年)、丸山二郎「日本書紀の研究」(吉川弘文館、一九五五年)、玉屋本に関する先行研究は以下の通りである。入田整三「玉屋本日本書紀の伝来について」(『書誌』四、一九二六年) 植田麦「非卜部系統『日本書紀』写本群について―為縄本・玉屋本・三嶋本―」(『實踐國文學』92号、実践女子大学、二〇一七年) 「玉屋本『日本書紀』の神代巻について」(『上代学論叢』、研究叢書512、二〇一九年) 大島信生「日本書紀巻第一、第五段(四神出

生章)一書第二をめぐって」(『皇學館大学神道研究所紀要』第二十輯、二〇〇二年) 近藤喜博「玉屋本日本書紀に就いて」(『藝林』第二卷第二号、一九五一年) 手嶋大佑『蓬左』第95号(蓬左文庫、二〇一七年) なお、玉屋本と関係の深い三嶋本については、植田麦「三嶋本『日本書紀』と『類聚国史』」(『文学史研究』第五十六号、大阪市立大学国語国文学研究室文学史研究会、二〇一六年) 「三嶋本『日本書紀』と具書について」(萬葉七曜会編『論集上代文学』三八冊笠間書院、二〇一七年) 前掲植田氏論文(二〇一七年) 前掲大島氏論文(二〇〇二年)、近藤喜博「三嶋本日本書紀に関する覚書」(『國史学』、第五十二号一九五〇年) 中村啓信「三嶋本『日本書紀』」(『日本書紀の基礎的研究』、高科書店、二〇〇〇年、初出一九五〇年) に詳しい。

なお、本論文における画像史料は、全て東京国立博物館公開のコンテンツを使用している。

(9) 入田製三「玉屋本日本書紀の伝来について」(『書誌』四、一九二六年) によると、小杉樞郎が交渉して、明治三十二年に東京国立博物館に買い入れたとある。

(10) 智積院の特定に関しては、近藤喜博「玉屋本日本書紀に就いて」(『藝林』第二卷第二号、一九五一年) で検討されている。

玉屋本『日本書紀』(安垣)

(11) 「玉屋」は吉原・江戸町一丁目にあった有力な妓楼で、「角玉屋」「火焰玉屋」との通称があった。嘉永元年(一八四八)に細見株を入手し、以後『新吉原細見』を出版している。

江戸吉原叢刊刊行会編『吉原細見 宝永〜明治』(八木書店、二〇一一年) 参照。

(12) 中村啓信「古事記日本書紀 諸本・注釈書解説」(神野志隆光編『古事記日本書紀必携』、學燈社、一九九六年)

(13) 前掲植田氏論文(二〇一六年)

(14) 前掲植田氏論文(二〇一六年)

(15) 前掲植田氏論文(二〇一九年)

(16) 前掲植田氏論文(二〇一九年)や、前掲近藤氏論文(一九五一年)、前掲大島氏論文(二〇〇二年)

(17) 真弓常忠『天香山と畝傍山』(学生社、一九七一年)

(18) 肉食や牛を殺すという点については、佐伯有清「牛と古代人の生活」(至文堂、一九六七年) 平林章仁「神々と肉食の古代史」(吉川弘文館、二〇〇七年) に詳しい。

(19) 他にも、神武天皇紀の文字異同は「魔」を「麻」、「葬」を「薨」、「盾」を「楯」、「舟」を「船」、「嗟乎」を「嗚呼」、「厄」を「屍」、「由是」を「是因」、「卒」を「率」、「大神」を「太神」、「来」を「米」、「基」を「墓」、「比」を「昆」、「曰」を「言」、「催」を「推」、「離」を「利」、「智」を「知」、

「句」を「句」、「介」を「省」を「看」、「式」を「戒」、「之」を「彼」、「為」を「曰」、「排」を「披」、「子」を「者」、「柳」を「耶」、「墨」を「黒」、「夜」を「耶」、「邏」を「良」、「怡」を「伊」、「辞」を「志」、「埴」を「垣」、「扶」を「尻」、「餌」を「深」、「刃」を「釵」、「流」を「沈」、「川」を「河」、「媛」を「姫」、「榧」を「榧」などが見られる。

(20) 祭神の「三島神」は「御島神」の謂。元は本社が白濱にあったが、延喜式撰上以後に三島へ勧請された。(式内社研究会編『式内社調査報告』第十卷伊豆国・甲斐国(皇學館大学出版部、一九八六年)

(21) 応神天皇を主祭神とし、当宮の縁起については「誉田宗縁起」に詳しい。(『応神天皇宗廟 誉田八幡宮』、一九七二年)

(22) 河音能平氏は若狭姫神社の縁起を若狭彦大明神の垂迹と神宮寺の建立を関連付け、十二世紀の若狭彦大明神の神格が新たに観念化されたと考察している。(『河音能平著作集3 封建制理論の諸問題』文理閣、二〇一〇年、初出一九七〇年)

(23) 近藤喜博「三嶋本日本書紀に関する覚書」(『國史学』、第五十二号一九五〇年)

(24) 他にも、前掲植田氏論文(二〇一七年)によって、「撰

嶺院授与記」(真福寺善本叢刊『類聚神祇本源』所収)に「良海」の名が記されていることが指摘されている。

(25) 中村啓信「日本書紀と中世神道」(『中世文学』第四十四卷、一九九九年)

(26) 原克昭『中世日本紀論考 註釈の思想史』(法藏館、二〇一二年、二十六頁、初出二〇〇八年)

(やすがき ゆうき・皇學館大学大学院博士前期課程)